|マンダリンヒーローの軌跡| Challenge〜挑戦

オーナーの了承を得て米国遠征が決まったものの、そこへたどり着く道は容易ではなかった。藤田調教師にとっては初めて経験することの連続で、輸送や検疫、そして現地での調整方法など、乗り越えなければならない課題が次から次に降りかかる。藤田調教師はなりふり構わず電話をかけまくり、海外遠征の経験豊富な矢作調教師、マスターフェンサーで米クラシックに挑戦した角田調教師、前年のケンタッキーダービーに出走したクラウンプライドの新谷調教師など、中央と地方の垣根を超えた人脈を頼って積極的にアドバイスを求めた。そして3月29日、堀田優志厩務員とともに日本を旅立ったマンダリンヒーロー。「想定外のこともありましたが、馬が頑張ってなんとか乗り越えてくれました」と話す藤田調教師。鞍上は2年連続でカナダのリーディングジョッキーを獲得している木村和士騎手に決まり、いよいよ運命の日を迎える。

マンダリンヒーローの鞍上を任された
カナダのリーディング・木村和士騎手

2023年4月8日(現地時間)、マンダリンヒーローは8頭立ての4番人気でサンタアニタダービーのゲートに入った。「掲示板に載れば大善戦」という声も現地では挙がっていたが、鞍上を任された木村和士騎手は「みんなを驚かせてやりましょう！」と自信たっぷりの表情でマンダリンヒーローに跨った。その木村騎手の言葉通り、中団追走から4コーナーで差を詰めて1番人気プラクティカルムーヴに迫り、直線では壮絶な叩き合いを繰り広げて並びかけたところがゴール。結果は惜しくもハナ差の2着だったが、ゴール後にプラクティカルムーヴのラモン・ヴァスケス騎手が馬上から木村騎手に「おめでとう！」と声をかけるほどの大接戦。ゴールの瞬間、藤田調教師と堀田厩務員の目からは涙がこぼれ落ち、新井オーナーは「ありがとう！ケンタッキーに行こう！」と泣きじゃくる2人の手をがっちりと両手で握りしめた。

ケンタッキーダービーへ出走できる馬は2歳時から米国を中心に世界各国で行われている指定競走のポイント積算数で決まる。サンタアニタダービー2着で40ポイントを獲得したマンダリンヒーローは、例年に倣うと確実に出走枠へ入れるはずだった。しかし今年は高ポイントを獲得している馬が多く、サンタアニタダービー終了時点での出走順は20頭の出走枠に対して24番目。それでもオーナーはマンダリンヒーローを米国に滞在させることを決断し、奇跡が起きるのを待った。そしてレースの2日前、奇跡は現実に起きる。直前になって回避する馬が相次ぎ、マンダリンヒーローは地方所属馬として初めて「スポーツの中で最も偉大な２分間」と言われるケンタッキーダービーのゲートに入ることになったのだ。慌ただしく駆け付けた新井オーナー、藤田調教師が見守る中、マンダリンヒーローは12着でフィニッシュ。鞍上の木村騎手は「とてもタフなレースになったが、最後まで一生懸命走ってくれた」とマンダリンヒーローの頑張りを労った。

サンタアニタダービーのゴール後
R.ヴァスケス騎手と会話する木村騎手

ケンタッキーダービー前日の調教風景
マンダリーヒーローと堀田優志厩務員

マンダリンヒーローの健闘を称え合う
新井オーナー、藤田調教師、木村騎手

大観衆が待つケンタッキーダービーの
ゲートに向かうマンダリーヒーロー

大井競馬場とサンタアニタ競馬場の長年の友好交流提携が実を結び、実現したマンダリンヒーローの米国ＧⅠ挑戦。この果敢なチャレンジは、家族経営で細々と競走馬の生産をつづける牧場や、地方競馬で日々馬と向きあう関係者に計り知れない勇気と希望を与えた。きっとこれからも、マンダリンヒーローが見た夢を追いかける馬が出てくることだろう。そして来年のサンタアニタダービー出走を懸けた戦いは、すでに始まっている。

SANTA ANITA PARK
FRIENDSHIP
Since 1995
TCK